

自己信頼性の育ちを尊重した発達診断、障害児教育

- 発達研究と自閉症児教育を通じた考察 -

○塚田直也¹ 飯島杏那² (非会員) 福田睦³ (非会員) 田中真介⁴

(¹筑波大学附属視覚特別支援学校²筑波大学附属久里浜特別支援学校³京都大学総合人間学部卒業⁴京都大学国際高等教育院)

キーワード：幼児期、自閉症教育、発達診断、自己信頼性、相互尊重性

【企画の趣旨】

近年、幼児教育や学校教育の現場では、子どもの将来の自立や社会参加のためという理由により、大人が望ましいと考える行動（個別的諸機能）を教え、身に付けさせようとする傾向が強まっている。特に、いち早く生活スキル等を育成するための早期教育や、社会的自立を促す障害児教育では、特定の行動ができたことや大人の指示通りに遂行できたことが評価され、子どもの気付きや発見、一人一人の個性的で多彩な表現が見落とされたり、軽視されたりしがちである。

これまでの乳幼児期、学童期、青年期の発達研究や自閉症児療育の実践研究により、自己信頼性（自分自身の価値を発見し、尊重する力）と社会的交流性（自分と世界のつながりをつくりだす力）の育ちが、手指、認知、運動など個別的諸機能の発達を支えていることが指摘されている。

本ワークショップでは、自閉症教育の実践報告と幼児期の自己信頼性と相互尊重性の発達に関する研究報告をもとに、自己信頼性が個別的諸機能の発達の原点となる大切な力となることを提起したい。その上で、指定討論者や参加者との討議を通して、自己信頼性を援助する方法を検討するとともに、そうした方法を発達診断や保育・療育・教育実践、子育てに生かすために必要な方策を考えてみたい。

【話題提供 1】

飯島杏那「自己信頼性の育ちを大切にしたい自閉症教育」

家庭生活から一歩踏み出し、集団生活を始める幼児期の指導では、子どもの好きなことを尊重し、大人がそれらに合わせて関わることを通して、共感関係を形成することが欠かせない。そうした共感関係を基盤とした社会的交流を積み重ねていくことで、子どもは、「自分が大切にされていること」を実感し、自分自身の価値に気付き、思いや願いといった内面世界を表現するようになっていく。そうした表現を身近な大人に受けとめてもらう経験を通して、子どもたちは、身近な大人が自分の行為に応答する大切な存在であることを発見する。すると、次第に、身近な大人の言動に興味をもち始める。その結果、大切な大人を追いかけたり、まねたりするなど、多彩なつながりが生成・発展していく。こうした幼児期を経て、子どもたちは学校教育へと歩みを進める。

本校は、知的障害を伴う自閉症児が学ぶ特別支援学校である。小学部には各学年6名の児童が在籍し、教師3名で指導している。近年は、学習指導要領をより踏まえ、子どもの将来像から目標や指導内容を設定し、実践している。しかし、こうした指導では、今を生きる子どもの多彩で、豊かな表現が見落とされてしまうのではないかと危惧している。

そこで、小学部3年生のH児を対象児として、新版K式発達検査2001等を実施し、自我発達の水準を押えた上で、自己信頼性の育ちを尊重した指導を試みた。

H児は、話し言葉を獲得し、一往復程度の簡単な会話ができる。着替え等、生活スキルを獲得しており「手のかからない子」である。一方で、教師の指示を聞き、「わかった。」と言いつつ、指示とは異なることを行い、笑顔で「見て見て。」と言う。相手の言葉の価値を感受することが難しく、自我の拡大・充実に援助を求めていることがうかがえる。

H児のように一見、自立的に行動できる子どもは、生活技能や学習態度の育成を目的とした受動的な指導を受けやすい。その結果、自分の大切さを実感する経験が不足し、自己

信頼性の育ちが制約される場合があるのではないかと。

実践報告をもとに、大人が考える望ましい行動を形成する教育ではなく、子どもの多彩な表現を受けとめ、子どもが自分の価値を実感していく教育のあり方や意義を考えたい。

【話題提供 2】

福田睦「幼児の自己信頼性と他者尊重性の発揮に周囲の大人が与える影響について」

日本の児童の自己信頼性は小学生において国際的に低水準であることが知られているが原因は明らかでない。また、自己信頼性が、善悪の判断や愛他的行動につながり、他者尊重性を発揮させることが示されている。

本研究では、幼児へのインタビューおよび配分課題、保護者と保育者へのアンケート調査を実施した。配分課題とは、同色の立方体の積み木10個を2および3皿に均等に分けさせることで幼児期の自我発達の水準を図る手法である。本研究では、こうした従来の課題に加え、10個の飴玉を「①家族2名と自分」、「②好きな／嫌いな友だちと自分」に自由に分けるという条件を設定し、配分結果と理由を確認した。

保護者・保育者のアンケート結果と、子どもの自由配分課題の結果と配分理由では、注目すべき連関がみられた。以下、特に筆者が注目した2事例を紹介する。

家族3者の課題(①)でのみ配分量に差をつけた子どもたちは、保護者による子どもの自己信頼性の評価および、子どもが幸せになれるかといった子どもへの信頼が低い。一方、保育者は、子どもの他者尊重性を高く評価した。保育場面では、片づけをテキパキと行う一方で、自由遊びの時間に何を遊ばか困っていたり、友達に輪に自分から入ることができずいたりした。また、その子は、保育者から「他の子の分も片づけてくれてありがとう」という声かけがあったことや、保護者から「手伝うことはないか」聞くように言われていると発言したことから、大人の望む行動を自分の行動の理由にしていることがうかがえた。

両方の課題(①②)で自分に最小量の1個を配った子どもは、保護者の子どもへの信頼が「わがままに育てているから幸せになれるか不安」と極端に低かった。保育者は、「自分の願いや気持ちを言葉にして伝えることができない」と自己信頼性を低く評価した。子どもから「喜ばれなかったので、もうお手伝いをしたくない」という発言もあり、保護者の子育てへの不安と子どもの不安との連関も推察された。

次に保護者への調査で特徴的な事例を紹介する。理想の子ども像で学力や人気といったステータスに関する選択肢を避けた保護者は、保護者自身の理想の自分達成率が低かった。その子どもはインタビューで、嫌いなものを答えることに抵抗した。保護者自身の生き方への不安と、子どもが自分の気持ちと向き合い、表現することの連関が示唆された。

【総合考察】

自己信頼性により、私たちは自分や相手を信じ、互いにつながることができる。大切な相手とつながった自己信頼性により、私たちは、過去・現在・未来を生きる自身の価値を認識し、次には、外界の価値を大切にできるようになっていく。

【参考文献】田中真介・塚田直也・横井川美佳・本原琴美(2022)「幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育」—日本応用心理学会第88回大会発表論文集(つかだなおや、いいじまあんな、ふくだむつみ、たなかしんすけ)